

経営(継業)のツボ



転期に立つ経営者の資質の鍛え方<sup>88</sup>

以心伝心

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

はやかわ・ひろし  
経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に「早川浩士の常在学場」(筒井書房)、「介護人財創造塾」(筒井書房)、「介護保険改正に勝つ!経営」(年友企画)、「データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望」(日本医療企画)など。

http://www.hayakawa-planning.com  
ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

心と心が通じ合っは稀なこと

言葉で説明をしなくても、心と心が通じ合うことを「以心伝心(心を以て心に伝う)」という。これは禅家の教義を表す言葉であり、言葉として表現できない真理を師が弟子に伝えるという意味がある。悟りとは修行を積んで、心から心へ伝えるもので、言葉で表すことはできないものである。同意語としては、言葉や文字にとられてはいけないという意を持つ「不立文字」や「教外別伝」「拈華微笑」などもある。

お互いの気持ちを通い合っていれば、表情や動作だけで十分に意思が伝わるはずだという意味で、「以心伝心」を安易に用いている人もいるのではなからうか。そう考える人の頭のなかには、「目は口ほどに物を言い」「言わぬが花」「言うだけ野暮」という俗諺が飛び交っているはずである。

口に出して言葉を伝えなくても、十分に相互の意思疎通は図れるし、心を通い合わせることもできると思っているのか、ハッキリと言うことを嫌っている人がいる。正論を振り回しすぎて、相手

の心のなかにズケズケと入り込むような物言いをしてしまう人も少なくはないが、これはこれでも少なりものである。

会津藩士の共通認識「什の掟」

会津藩砲術師範・山本権八の娘として生まれ、戊辰戦争時には断髪・男装でスベンサー銃を持ち、若松城籠城戦で奮戦したことで幕末のジャンヌ・ダルクとも称された新島八重(同志社大学創立者・新島襄\*の妻)。NHKでは彼女の一代記を描いた大河ドラマ「八重の桜」が始まった。

会津藩士の子弟が10歳で全入した藩校・日新館の授業は、論語や大学などの四書五經に、孝経や小学を加えた計11冊の中国古典の素読から始まる。

子弟は、6歳になると近所の寺子屋などに通って、この練習をすることが日課となっていた。また、日新館では、会津武士の規範を説いた「心得17か条」の実践も求められた。そのために、入学前の子弟自らがつくって率先垂範したのが「什の掟」である。

一年長者の言ふことに背いてはな

- 一 りませぬ
- 一 年長者にはお辞儀をしなければなりません
- 一 嘘言を言ふことはなりません
- 一 卑怯な振舞をしてはなりません
- 一 弱い者をいぢめてはなりません
- 一 戸外で物を食べてはなりません
- 一 戸外で婦人と言葉を交へてはなりません
- 一 ならぬことはならぬものです

「什」とは、10人前後でつくる集団を指し、年長者が什長(座長)となつて「什の掟」を唱和しながら、「会津武士の子はこうあるべき」と確かめ合っていたという。

背いた者への処罰には、皆に向かつて「無念でありました(私は会津武士の子弟としてあるまじきことを行い、名譽を汚したことは申し訳がなく、真に残念である)」と、お辞儀をして詫げる「無念」の刑が科せられた。

封建時代の名残が漂う「什の掟」ではあるが、「会津武士の子はこうあるべき」と、子弟は「以心伝心」したに違いない。

さて、「介護職はこうあるべきだ」と「以心伝心」のできるトップは、何人いるのであろう。

\*本誌2008年6月号本欄参照